野村生涯教育だより

No. 425

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

(公財) 野村生涯教育センターの
シンボルマーク
[n] は、名称「Nomura」と、
基本理念「自然観 = Nature」の
頭文字を表している。

もくじ

● 令和 2 年度　野村生涯教育講座
開講の願い
開講に向かって
講座開講 全国講座・人間学研究会
● 家族との調整を課題に自己教育　高年講座
● 学ぶよろこび

尾瀬ヶ原の朝

令和 2 年度　野村生涯教育講座開講

開 講 の 願 い

2020 年の今年、新型コロナウイルスの世界的大流行により、社会、世界は大きな変化を余儀なくされています。

この予想だにしなかった新型ウイルスの蔓延は、世界中の人たちが、一様に自分の命の危機と直面しなければならない事態を作り出しました。6 月末、世界の感染者数は 1,000 万人を超え、未だ収束の兆しも見えず、専門家はむしろ、感染拡大の第二波、第三波は間違いなく来るとの見方を示し、経済活動の自粛の行き詰まりからくる窮状も、ますます厳しくなることが予測されています。

しかしコロナ以前の、ここ十数年の私たち人類の課題を見ても、世界的異常気象による自然災害の度合いは年を追うごとに厳しさを増していました。

このように、生とし生けるものの住み処である地球環境の危機と、コロナによって一人ひとりの命の危機を自覚する今、私たちはどう生きたらいいのか、日々の生活の中で思い悩む毎日ではないでしょうか。

創設以来、野村生涯教育は「人間は自然の一物であり、自然界の中で生かされている存在である」と説いてまいりました。

そのことが実感となるような、この度のウイルスの出現や例年の異常気象による自然災害が頻発する毎日の中で、私たちが掲げてきた「社会人生に触れ合うすべての条件は、自己教育の教材である」を思うとき、今あるこの事態から、何を学び取り、どう自分の、延いては社会、世界の未来を創造していくのか、を一人ひとりが真剣に自分の問題として捉え、考え、知恵を寄せ合っていく必要を思います。

この時代を生き、未来を創っていく責任を思い、改めて、人間の無限の可能性の開発を教育の目的に据えた「未来創造学としての生涯教育 ― 野村佳子生涯教育論」を皆様と共に学び合いたく、今年度の講座のご案内を申し上げます。

開講に向かって

当センターは毎年『野村佳子生涯教育論』を年間全八回で学ぶ「生涯教育定例講座」を全国各支部・連絡所のリーダーを対象とした全国講座を中心に、東京・代々木で行う本部講座と地域講座・勉強会、そして読書会を開催している。

しかし、理事会は今年三月末、新型コロナウイルス感染症の急速な拡大とそれに伴う社会状況に鑑み、新年度四月の開講延期と、その他の人が集まっての活動も大幅に自粛した。その後、五月二十五日の緊急事態宣言全域解除を受け、地域差なども考慮しながら、段階的に活動や事務局運営を再開する一方で、理事会では講座開講をどのように行うかの検討を重ねていた。そういったなか、全国講座受講生たちがどう思っているかを、三人の研修・地域担当を通して聞き取りを行ったところ、全国講座で是非学びたいとの思いがあることがわかってきた。しかし、都市部においては感染者が再び増加し、特に東京で二二〇名余のリーダーたちが一堂に会し、講座を行うのは難しい状況が続いていた。

そうした頃、毎月全国講座の会場に使用していた施設が、七月から施設利用を再開するとの情報が入った。金子由美子理事長は「第二波への懸念があるなか、次に講座を持てるタイミングがいつになるかわからない。今のうちに何とか開講を」との思いになったと同時に、それまで高齢層が多くなってきたセンターでは、社会で推奨されはじめたオンラインでの講座は、さすがに厳しいと考えていたが「とにかく、全国各地のリーダーの皆さんとお会いしたい。各地を繋いだオンライン形式の全国講座はできないか。とにかくチャレンジしたい」との強い願いとなり、専務理事、理事をはじめ研修・地域担当等と話し合い、その願いを共有しながら七月にオンライン形式での全国講座開講の方向性を固めた。

そこで研修・地域担当は、まず全国の支部・連絡所の責任者一人ひとりにその意向を伝えた。はじめは「オンラインって何？」「とても自分たちには無理」との声が上がり、特に高齢層の責任者は、最初は躊躇する気持ちが強かったが、理事長の「失敗してもいい。まず皆さんと顔を会わせることが大事。これはチャレンジです」との思いが伝わり、責任者たちも「何とかオンラインで繋がり、講座を持ちたい」と意識が変わっていった。

その頃本部では、オンラインセミナー運営の経験があるという当センター施設の音響・映像設備業者の協力を得、約三週間という短い準備期間でも可能であるとの判断に至っていた。そして各支部・連絡所に地域の状況や交通事情など詳細な聞き取りをして拠点をまとめ、最終的に東京を主会場に全国十四会場を繋ぐ「オンライン全国講座」の開催を決定した。

具体的な準備の窓口となった全国講座責任者は、主会場となる施設の臨時回線工事が通常一カ月かかると言われ、その工事の下見日程の調整も難しい状況になるなど、切迫した準備作業に、とにかく事柄を進めなければと焦っていた。先輩から「自分には無い視点をもらうためにも周囲の人に相談することが大事」との助言を受け、また度重なるミスから本部に指導を受けるなかで自分をふり返ると「このくらいわかっていなければ。失敗はダメ。怒られたくない」という意識が働き、周囲の人にありのまま聞いていかれない自分に気づいた。自分の目線で見える範囲で物事を判断して事を進めていることがわかり、責任者という重大な役を通して自分を知ることを改めて目的に据え、準備を進めていった。その後、業者関係の調整は順調に進み、回線工事も前日に無事行われ、間に合う計らいがついていった。

また、各地域では責任者を中心に、拠点となる会場探しや当日の設営準備などが進められた。パソコン担当となったメンバーは夫や子どもに操作を教わりながら、当日に向けて備えていった。

そうして迎えた七月一日（水）、二日（木）の二日間、国立青少年総合センター国際会議室を主会場に、当センター初の「オンライン全国講座」の開講が実現した。当日、すべての会場が繋がった時には感動の声が上がり、業者の方たちも「皆さんの笑顔が見られて嬉しいです」と、喜びを共有し一体感に包まれた。そこに関わるすべての人たちの願いがひとつになり、実現できたこの度の開講は、それぞれにとって自己を知る、そして家族が繋がるチャンスとなり、人間の無限の可能性への挑戦となった。

令和二年度 野村生涯教育講座開講

前述のとおり、今年度の開講は七月に迎えるに至った。全国講座以後、その他の本部講座である一般、土曜、高年の各講座は東京都の感染状況等に鑑み開講を延期した。青少年学習講座については宿泊研修は取り止め、日中のみの日帰り研修とした。

また、地域講座・勉強会は各支部・連絡所が地域の状況を踏まえたなかで、開催日直前まで調整を取る必要に迫られる支部もあり、それぞれが課題と収穫を得つつ、最終的に二十七カ所で開講を迎えた。

今号は、全国講座、人間学研究会の模様をお届けする。

全国講座

七月一日（水）、二日（木）に全国十五拠点から二一一名が参加し、オンライン形式で開講を迎えた全国講座では、初日午前中、運営会議が二月の全国講座生勉強会以来五カ月ぶりに持たれた。

はじめに挨拶に立った金子理事長は、画面に映る十四会場で参加している受講生たちに「画面を通してでもこうして〝会う〟ことが叶ったことを嬉しく思うとともに、この日を迎えられたことを感謝し、共に学んでいきたい」と述べた。その後、五カ月の間の本部・事務局各部の報告が、理事、理事補佐等からなされた。

午後からは講座が始まった。今年度、カリキュラムは例年と異なり変則的にならざるを得ず、七月の全国講座では第一章と第二章の前半の講義が行われた。

野村生涯教育論「第一章　生涯教育への道程」は金子理事長が講義を行った。

理事長は講義の中で、未だ収束の目途が立たない新型コロナウイルス感染症の再拡大の状況、また地球温暖化と多発する自然災害に触れ「私たちはどこを向いても危機的な環境の中にいます。創設者は『原始社会においては、生きることは学ぶことそのものであった』と説かれた。コロナ禍にある私たちは二十一世紀における『生きることは学ぶこと』に目覚めることが必要ではないか」と述べ、世界的教育改革の理念として生涯教育が誕生した一九六〇年代の社会的背景を詳述した。そして「便利な機器が生活の中に一気に浸透していった時代に多発した青少年の不幸の問題を動機に活動を始めた創設者は、その原因を探究する中で、科学技術文明が物質的繁栄や便利さをもたらす一方、内的には人間精神の疎外や崩壊、外的には諸公害や生態系の破壊をもたらし、地球の存続をも危うくしていると、既に洞察されていた。そして地球という小さな惑星に住み合う人類は運命共同体であると認識することの重要性を世界に訴え続けてきたが、今、新型ウイルスの出現により人類が同じ危機を共有し、まさに運命共同体を認識せざるを得ない時を迎えている」と指摘。そして一人の有り様が世界と繋がっていることを実感させられる今こそ、経済的志向を基盤とした既成の教育から、人間の生命の価値を基盤とした教育への転換をはかる重要性を語った。

その後の質疑応答では、各会場から次々に手が挙がり、今年度から受講した五十代女性の「新型コロナウイルスの問題で今後、第二波、第三波のことを踏まえて、考えを伺いたい」との発言に、理事長は「今の質問は、お答えするのにとても難しい課題を孕んでいると思います。自然界の中に

余計なものは無く、細菌もウイルスも何かの理由があって存在しているはずです。それを私たちが人間中心の社会を築いていく中で必要以上に排除し、他の生物の棲家を奪っているのかもしれないと思った時、この新型ウイルスの出現は、共存するべきものを排他してきた人間の罪過に対しての警告ではないかとも思うのです。私たちは災害を受けているだけではなく、自然界に対して災害をもたらしている側でもあると言えるのではないでしょうか。ですからその自覚に立ち、経済と自粛のバランスを取った生き方を模索していくことが大事だと思います。バランスを欠いているさまざまな側面を自覚し、それを修正していくことの必要性を、この見えないウイルスから示唆されているのではないか。すぐには答えが出ないテーマですが、それを万人が課題にしていくことが必要だと思います」と応えた。

二日目は「第二章　野村生涯教育の構想生涯教育の基本哲理―東洋の自然観」の講義を、前半を研修・地域担当の伊藤正子さん、後半は佐野美智代さんが行った。

初日の理事長の講義を承け、人間を原点に据えた教育を取り戻すには「人間とは何か」「人間の価値とは何か」「生きるとは」への解答を用意しなければならないと説いた創設者が、自然界の構造、秩序・法則にまで立ち返って紐解いた「自然界と人間の関係」を講師が詳述した。講師を務めた二人は、オンラインでの開講の準備にあたり、同じ研修・地域担当として各支部・連絡所と関わりを持つ中で、お互いに感じるものを出し合い、ぶつかり合うこともあった。そうした葛藤から理事長の指導を受け、互いに相手に感じることが自己を知る手掛かりとなり、今回のテーマにある「自然界における人間の位置づけ」を実感するプロセスをそれぞれが語った。

二日間を通して、受講生からは開講までのプロセスで自身の開発の可能性に挑戦できたことへの感謝や、同じ場を共有できたことの感動が述べられた。また講義を聞き、今の社会に見る経済価値優先の価値観、自分本位のものの見方が自分と重なったという反省や、一人の意識の変革の大きさを受け止めたという発言が続いた。この学びの貴重さを確認し合う講座となった。

人間学研究会

企業人、経営者などが主な対象の人間学研究会は、七月十一日（土）当センター第二研修会館にて、金子理事長を講師に迎え、受講生三十名が参加し、開講した。

東京の感染者数が二百名を超えた九日、こうした状況下で参加をどのように考えるか、担当者が受講生に投げかけると「危機的な状況下で方向性が見えないからこそ、センターはどのように自己の課題として受け止め、対処しようとしているのか聞きたい」「是非参加してこれから立ち向かえる何かを掴みたい」との声が多く上がったことから、予定通りの開催となった。

責任者の伊藤正子さんの挨拶に続き「公益財団法人 野村生涯教育センターのあゆみ」のビデオを上映。そして金子理事長が、野村生涯教育論「第一章 生涯教育への道程」の講義を行った。

理事長は、オリンピック開催が予定されていた七月、コロナ禍で状況は一変し、経済の面からも生きていくことの難しさを実感する昨今、そして異常気象による被害、相次ぐ地震など、自然災害の恐さを肌で感じる現状に触れ「こうした感染症や地球温暖化の問題は、私たちが生きていくことを学ばなければならないと、改めて教えていると思います。近代以降、教育の目的が生きることから離れ、良い生活、経済成長のための技術、知識の習得となり、人間が社会にとって経済力や成果を生み出すための手段と化していった。そしてＡＩに、人間の労働を取って代わられるかもしれない時代に入ったところに、私たちはこの感染症と出合っている。本来の教育の目的である『生きることを学ぶこと』に目覚めることが万人に課されている命題なの

ではないかと思います」と語り、自分たちがどういう時代を生きているのかの認識を持つことの重要さと、その時代を生きる自己とは何かを知る自己認識の重要さを強調して述べた。そして、人間のミクロ的な自己の意識が意志となり行動を起こし、対象物との関係においてマクロ的な外界の環境を作り出している。それ故、政治、経済、社会のすべての担い手である人間の教育こそ、すべてに優先するものとして位置づけることの重要性を語り、創設者が説く教育改革の四つの要点を詳述した。

全体会では、受講生からコロナ禍の激変の中での思いが話され、理事長が一人ひとりに応えた。

五十代のUさんは「ドイツで夫と暮らしているが、外出制限への反対デモが行われ、日本で育った私には理解し難かった。そうやって今まで日本とドイツを比較し、対抗するような気持ちがあったが、新型ウイルスの問題から、世界は私が思っているより密接なのだと実感し、このままではいられないと今回参加した。時代認識と自己認識が表裏一体だということを意識し自分を見ていきたいと思った」との発言に、理事長は「西欧とアジアの思想の違いを目の当たりにしたご夫婦間の葛藤を聞かせてもらいました。自分の在り方、ご主人との在り方が世界平和と繋がっていると受け止められたことは、大きな収穫だと思います」と助言した。

五十代のMさんは「私はサラリーマン生活において、経済最優先という葛藤や戦いが常にあった。そうしたなか新型コロナウイルスの問題が起き『野村生涯教育だより』の四二三号にあった理事長の『命か経済かという話ではなく、どうバランスをとっていくかが大事』というお話に感銘を受けた。しかし世界では大国がいがみ合い、協調や安定には程遠く、経済重視でどう復興させるかの方法論に走っているように感じる。やはりトップの人たちが、命と経済のバランスをとる実践を話し合うことが必要だと思う」との発言に、理事長は「トップの方たちに、というのはおっしゃる通りだと思いますが、まず私たちが今できることとして、私たち自身がそのバランスの大事さに目覚めていくこと、そして草の根の私たち一般大衆が繋がり、力にしていくことで、もしトップの方に伝えていくことができるならば、世の中が少しは変わるのではないでしょうか」と応えた。

その後も、コロナ禍に豪雨も重なり、社員の自宅に被害が出るなどの苦しい現状、また四十代の女性からは、在宅勤務が推奨されたが、職場での繋がりが切れ、家族の中で仕事をする慣れない環境が高ストレスとなるなど、メンタルヘルスが問題となり、逆に出社を促す流れも出てきたことが話された。

四十代のKさんは「二十年以上務めた会社を退職し、四月に再就職したがすぐに在宅ワークとなった。戸惑いもあったが、ふと立ち止まり自分のことを考える機会になった。これまで目の前の仕事をし、今新たなチャレンジをしようとしているが、自分が生涯を終える時、今までやってきたことは誇れること、人に感謝されることだったといえるだろうか、と思いながら参加した。講義で、教育とは一生をかけて人間が人間らしくなるための作業だと聞き、自分が人間らしく生きることが大事なのかと楽になった。そして生涯に亘って学んでいくことなのだなと感じ取れたので、今日は参加してよかった」と話すと、理事長は「年齢を経たときに感じる『人に喜んでもらいたい』という感覚は人間の本性にあるのだと思うのです。Kさんはそうした時期を迎えているのだと思います。それを大事にしていただきたいです」と応えた。そして最後に「皆さんが本気でこの学びを求めていらっしゃることを感じ、それが今度は私のエネルギーになっています。全員の方のお話を伺いたいですが、また次の機会というものが何とかできるように願い、今日を終わらせていただきたいと思います」と締め括った。

家族との調整を　課題に自己教育　高年講座

全国講座が七月に開講され、延期となっていた高年講座も七月十七日（金）に当センター第二研修会館で行う予定となり、高年部担当と正副責任者たちは準備を始めた。しかし、東京の感染者はその後、日を追って増加し続けた。何とか開講をと願うメンバーに、金子理事長はじめ本部は「お一人おひとりの開講への願いは尊いが、高齢者が感染した場合、重症になる確率が高いことを考えると、家族としっかり話し合うように」と関わった。そして、前日まで検討を重ね、最終的には延期を決めた。このプロセスの中で、高年部メンバーは家族との関係を自己の課題とし、多くの収穫があった。

全国講座の開講が決まり、責任者のKさんは「これで高年講座もできる」と思い、東京と近県三県から参加する七十代から九十代の受講生たちに話すと「県を跨いで行くのは不安だ」という意見もあったが、夫婦で学んでいるD氏からは「今年はこれだけの危機的状況だからこそ受講し、しっかり学びたい」という声が上がった。八十代のIさんは、昨年自身の骨折や夫の病気を通して、高年部で関りをもらい、老いをありのまま受け入れる構えを持つことができ、その後夫婦ともに快方に向かったことが感謝になっていた。夫に開講のことを話すと「大事な学びだから行っておいで」と押し出してくれたという。

全国講座初日に行われた運営会議で、本部から示された感染予防対策を確認した正副責任者たちは、再度受講生たちに開講についてどう考えるか気持ちを聞くなかで「危機的な状況だからこそしっかり学びたい」との願いを強く感じ、高年部担当のYさんにそのことを繋げ話し合った。そして理事長に改めて高年講座開講を願い出、十七日という日程を決めた。

講座準備会を控えた七月九日には、東京で感染者が二百人を超えたが「人生の仕上げの時期の大切な課題は精神的自立である」と学ぶスタッフたちは、電話で連絡を取り合い準備を続けていた。その様子に担当理事は「皆さんの気持ちはわかるけれど、ご家族とは話し合っていますか？こうした条件からご家族との関係を見直すことが大事なことではないですか？」と投げかけた。担当と正副責任者は今まで準備会や講座の参加は自分の意志で決めてきたので、特にこうした状況下で家族に話すのはためらいがあった。それでも実践を試みると、Kさんは、離れて住む娘から「こんな時期だから人の集まる所に行くのはやめてほしい」と言われた。他のスタッフにも家族と話し合うように伝えると、ほとんどの家族が反対とのことだった。そのことを理事に伝えると「ご家族は心配しているのではないかしら？」と言われ、Kさんはハッとした。一人住まいなので日頃自分のことは自分で考え決めてきたが、娘の思いを感じ、心配してくれる家族がいることに心が温かくなった。担当のYさんは長女と話すと「これを見て考えて」と専門家の意見など客観的な情報を提示された。それまで何としても講座の開講をと願っていたが、家族の心配する気持ちを受け止めた。そしてそのことで自分の心が広がったと理事に感謝を伝えた。またD氏からも「客観的な感染者増の状況を踏まえ今回は延期することではないか」との意見が寄せられた。

講座前日に感染者は二八六名に増えた。そうした社会状況を踏まえた上で開講に向けてスタッフは家族と気持ちを通わせる機会となり、喜びとなったことを収穫に、高年講座の七月開講については延期が決定された。

高年部メンバーは、延期を残念に思いながらも、家族の絆を実感するプロセスを辿れたことが感謝となった。

学ぶよろこび

財務部　本山せい子

私は現在、センター本部事務局で財務の役をいただいています。

長年、看護師として働き、現在勤めている夜間の小児科の診療所は、大学病院、開業医の先生方が当番制で三六五日休むことなく深夜まで対応する医療機関です。

新型コロナウイルスの世界的大流行から、当診療所にもウイルスについての注意書きや感染者状況のお知らせが届いていますが、その内容も二転、三転と最初は定まりませんでした。感染症に対しても、先生方と看護師それぞれに意見があり、チームドクターの責任者も頭を抱えていました。七月下旬現在「医療機関は逼迫していない」との報道もありますが、昨今、再び感染者が急増し、第二波の脅威がすぐ目の前に来ていると感じます。

そうした危険を強く感じる職場にいることから私はストレスを感じはじめ、動悸の症状が出るようになりました。その上日増しに医療従事者への偏見、差別などが報道されるようになり、勤めている限りこれまでのようにセンターに行くのは迷惑にならないかと、気持ちも乱れてきました。

その頃、金子理事長が私のことをご心配くださり、その旨を受けた理事補佐から電話をいただきました。動悸がすることを話すと理事長に繋げてくださり、重ねて理事長からの「医療従事者である本山さんのしていることが、どれだけ大事な役割を持った仕事なのか、誇りを持ってください」との指導を伝えてくださったとき、とても安心した気持ちになり、徐々に動悸が治まってきました。そして漸くセンターへ気をつけながら行ってみようという気持ちになりました。

約三カ月ぶりに本部に行った際、理事長は私のために時間をとってくださり、驚きと喜びになりました。そして学びはじめのきっかけから、現在の病院での厳しさを、ありのまま聞いてくださり、その中で自分をふり返ることができました。

私は三十一年前、高校生だった長男が荒れだし不登校になったことで、紹介を受け、センターの「教育相談」に通い始めました。先輩から「お話の中にご主人がまったく出てきませんが、ご主人は息子さんのことを何と言っているの？」と聞かれ、夫に聞いたことがなかったので答えられませんでした。「子どもの問題は夫婦の問題です。ご主人との関係を見直すことが大事です」と言われましたが、私は問題解決の答えが欲しいと思い参加したので、なかなか受け入れられませんでした。それでも、一時は仕事も辞め、葛藤しつつも努力しました。私たち夫婦はあまり喧嘩をすることも無かったのですが、私は夫に物足りなさを感じていました。夫に「出かけるの？」「これ食べる？」と聞いても「うん」としか言わないので、ある日「なんで自分の考えを言わないの？」と聞くと「俺が一言言うと、十倍返ってくるから」という答えでした。そうしたことを先輩にありのまま話すなかで、少しずつ自分の凄まじい強さを知っていきました。その日々のなか、それまでにはなかった、お風呂の中から夫の鼻歌が聞こえてくるようになり「家庭の幸せってこれ？」と私自身幸せ感が持てるようになり、夫婦喧嘩も、話し合いもできるようになりました。その後、息子も落ち着き、夫婦旅行でもと考えていた矢先、主人に癌が見つかりました。娘の結婚も決まっていたので、それまではと夫も頑張ってくれましたが叶いませんでした。

こうしたことを理事長に聞いていただくうちに、こんなにも夫婦の絆を深めてもらってきたのだと改めて自覚にのぼり、感謝となりました。

そして理事長は「貴女がまず元気にならないとね。今とても大事な医療に関わる方々に元気になってもらうためにも、本山さんが聞いてもらって元気になって、そうした方々の話を聞いて差し上げられるといいわね」と励ましてくださいました。

私は、仕事の忙しさから息子を道に迷わせてしまったと、看護師をしてきた自分を否定する気持ちがありましたが、今回、理事長から医療従事者の役割の大きさを言っていただき、社会に必要なことに携わっていることに誇りを持つことができ、否定的な受け止めを払拭できました。理事長からの関わりをいただき、改めて自分がこの学びで得た大事なものに気づくことができ感謝になりました。これからも学びながら仕事に励みたいと思います。